

二松学舎大学人文学会 第一二八回大会 要旨集

二松学舎大学人文学会第 128 回大会

■日 時 2024 年 7 月 20 日 (土) 12:50～ (開場 12:30)

■開催方式 対面

■会 場

研究発表 二松学舎大学 九段キャンパス 1 号館 2 階 201 教室

講 演 同館 地下 2 階 中洲記念講堂

■タイムスケジュール

12:50 開会挨拶

13:00 研究発表 (各 30 分(発表 20 分、質疑応答 10 分))

長谷川 豊輝	『日本書紀』七番歌考 ——神武の「御謡」から楽府の「歌」へ—— 本学文学部専任講師
山路 裕	「王畿思想の再検討 - 「歴代史纂左編凡例」を例に-」 本学大学院文学研究科博士後期課程 中国学専攻単位取得満期退学
富田 陽一郎	「「火まつり」考 ～中上健次『火まつり』研究と、宗教儀礼としての火祭り考～」 日本大学豊山高等学校・岩倉高等学校非常勤講師
江藤 茂博	「芥川龍之介『老年』を中心に」 本学文学部教授

15:30～17:00 講演

高木 和子	「源氏物語の言葉と思考」 東京大学大学院人文社会系研究科教授
-------	-----------------------------------

17:00 閉会

17:10 総会

18:00 懇親会

『日本書紀』七番歌考

——神武の「御謡」から樂府の「歌」へ

長谷川 豊輝

本発表は、『日本書紀』神武天皇即位前戊午八月の記事に載る七番歌を分析対象として、当該歌が八世紀的秩序を超越したものであるとして示されていることを明らかにするものである。七番歌は、歌を導く散文（歌謡表示）において「乃為_二御謡_一之曰_レ」と示されるが、『日本書紀』において当該語により歌謡表示がなされるのは神武天皇の歌（所謂、来目歌）のみである。『日本書紀』における「謡」の用例が来目歌・童謡・謡歌のみであること、漢籍において当該語が「徒歌」（『爾雅』の意で用いられることを鑑みると、七番歌は曲を伴わないものであったと示されていると見ることが出来る。また、『豊後国風土記』速見郡の記事において、皇命に従わない「無礼」な者たちの言葉が「謡」と示されていることを踏まえると、「謡」は八世紀的秩序を超越した原始的なものと位置付けることができるのではなからうか。以上を確認した上で歌に付された注記（「是謂_二来目歌_一。今樂府奏_二此歌_一者（中略）此古式之遺式也。」）の分析を行い、八世紀的秩序を超越したものと捉えられていた神武の七番歌（「謡」）が秩序内の論理で理解可能な「歌」に置き換えられ、樂府に保存されていくさまをも明らかにして見たい。

王畿思想の再検討

——「歴代史纂左編凡例」を中心に

山路 裕

王畿（1498～1583）は、明代の王守仁（1472～1527、号は陽明）に師事し、その生涯のほとんどを師説伝播に傾けた人物である。その彼に、「歴代史纂左編凡例」と題する文章がある。これは、王畿の友人で文章家として知られる唐順之（1507～1560）が編纂した『歴代史纂左編』に附された凡例であるが、王畿の全集には収録されていない佚文であるため、陽明学研究においてこの史料は分析されてこなかった。

「左編凡例」は、単なる凡例というにとどまらず、王畿の思想を反映したものである。またこの史料の分析を進めていくと、それが王畿一人の手に成ったものではなく、『左編』という編纂物を通じた、王畿と唐順之の学問的交流によって成ったものであることが分かった。

そこで本発表では、これまでの陽明学研究では注目されてこなかった「左編凡例」を主として用い、王畿と唐順之による、生き生きとした学術交流の一端を窺い、従来とは異なる視点から、王畿思想の多面性を照射したい。

「火まつり」考

——中上健次『火まつり』研究と、

宗教儀礼としての火祭り考

富田 陽一郎

・小説作品、中上健次『火まつり』を主な素材としてまず研究し、その上で、世界中に流布する「火祭り」について考察し、その文学的意味、宗教的・民俗学的・文化人類学的意味についての理解を深める研究・考察を行いたい。

・より具体的には、

- 1 小説作品・中上健次『火まつり』の近現代文学研究
- 2 世界中に流布する「火祭り」の研究
- 3 この2つの研究から見えてくる、新しい発見や考察の提示

・今回は、中上健次『火まつり』の文学テクスト内における「火」「火祭り」の意味と、中上健次文学全体における「火」の意味、悪の化身↓善へ、聖化、浄化（カタルシス）、といった意味をまず整理し、その上で、熊野学における神倉神社の「御燈祭」の意味、また、隣接する火祭りとして、「那智の火祭り」、あるいは、日本各地の火祭り、世界各地の火祭りの意味について概観し、「火」の、文学作品における意味合いのようなもの、を、考察し、提示してみたい。考察にあたって、ゾロアスター教に関する考察や、西欧哲学史・宗教史に

における「火」の考察や論理も、参照したいと考えている。

芥川龍之介『老年』を中心に

江藤 茂博

本研究発表では、芥川龍之介の文学活動において、初期の発表作品とされている『老年』を取り上げる。研究史としての、近代性という評価軸による吉田精一や三好行雄の作品評価、伝記的な文脈による関口安義の作品評価、さらに20世紀末から21世紀にかけて拡がった、時代の文脈に配置する解説や「語り手」の機能からの解説などの方法的な分析を、まず踏まえながら、ここで対象とするテクストへの新たな評価・解説を試みたい(1)。「主題をなす老人の心理描写は、手薄」(吉田精一)、「人生を見果てぬ夢としてふりかえる、やや背伸びした青年の稚い老成の表情」(三好行雄)、「作者のまなざしは(生きる)ことに集中」(関口安義)などとされてきた『老年』評価に対して、ここでの新たな語りの目論見という解説(1)が可能だった場合、初期芥川龍之介文学についてどのような知見をもたらすのか(2)、なぜ生前に『老年』は作品集に収録されなかったのか(3)を、テクストの特性から考えていくことにする。